



日吉の丘

2007.11.15
Une colline de
Hiyoshi
Vol.8



ALUMNI ASSOCIATION NEWSLETTER

最初にアルヴァロ・ロドリゲス ラ・サール会総長が、メキシコで開催された世界大会で講演された内容の一部を紹介したい。「元総長パブロ・バステレチア 修道士がよく『軽々しくラ・サールの名前を呼んではいけない』と言われました。たしかにラ・サールの名前を資料館の陳列品にしてしまったり、スペインの詩人ホルヘ・マンリケが『あの頃はよかつたのに』と言うように、自分がラ・サールの学生の頃は今のラ・サールなんかよりずっとよかつたのにと過去を思い出すだけでは、ラ・サールの名前も廃れてしまい…。：ラ・サール学園の教室で習ったラサリアンの価値観が実際に現在の子供達、若者達、貧者、兄弟姉妹愛、平和、人間家族の結合のために私達を鼓舞するなら、私達はラ・サールの名前をまさに相応しく呼んでいる者となる事が出来ましよう。」このメッセージには、同窓会員あるいは同窓会が求められている基本姿勢が凝縮されており紹介した次第です。ラ・サリアン、ラ・サールファミリートと呼ばれる人々は、須くこうあって欲しいと、またこうあるべきと考えております。さて、昨年の会報でもご紹介しました、ホルヘ・ガヤルド管区長が、五月のラ・サール会ローマ総会において、ローマ駐在最高評議員の一人に選出されました。そのホルヘ管区長は、私たち日本のラ・サリアンに貴重な問いかけを残して、七月の中旬ローマに赴任致しました。ホルヘ管区長はお会いするたびに「我々ももっとラ・サール会の歴史を知るべきである」と話されておりました。聖ラ・サールのことは勿論、ラ・サール会の歴史

については、ことあるごとに会員に紹介すべきではなかるうかと思っております。ラ・サール会が日本へその第一歩を印したのは、昭和七年（一九三二）の十月二十二日、ここ函館の地で今年で七十五年目をむかえます。カナダから来日した四人の修道士の名は、マルシアン・ローラン（三十五歳）、マリー・リゴリ（三十五歳）、マリー・マルセル（三十七歳）、メラン・ダニエル（三十四歳）で、この若きブラザーの来日目的は、函館の地にラ・サールの学校を設立することであ

軽々しく
ラ・サールの名前を
呼んではいけない



函館ラ・サール高校同窓会会長
齊藤 裕志 (5期)

つたとされております。最初は、土地の購入を含めてその計画は順調に進んでいたかのように思われましたが、時代が戦争へと突き進む雲行の中で、この函館には要塞があつたことも災いし、学校設立は断念せざるを得ませんでした。当時の市長、知事、近郊の村長、そして函館市民はこぞって学校建設を切望しましたが、種々の事情からその拠点を仙台に移すことになりました。そのことが、太平洋戦争の終結と共に、仙台ホームの設立へとつながっていくわけです。また、戦

時中のブラザーが受けた精神的、肉体的苦難は、筆舌に尽くし難いものがあったそうです。多くのブラザーは修道院ではなく北浦和の收容所へ抑留され、そこで終戦を迎えることになりましたが、その際受けた取り調べは大変厳しいものでした。一方、函館に来たリゴリ修道士は、満州の吉林で小学生の教育に従事しており、開戦と同時に中国国内に抑留され、昭和十八年（一九四三）十月二十八日、心臓衰弱により帰天しましたが病床にあつても、うわごとの中で教室で生徒に教え、祈り、聖歌を歌いながら、四十六歳の生涯を終えたと聞いております。リゴリ修道士の日本及び中国での生活は決して楽しいものではなかつたはずですが、しかしリゴリ修道士が両国に残したそのキリスト教的精神は、日本におけるラ・サール会の大きな礎になっていると言つても過言ではないと思つています。以後、昭和二十三年（一九四八）光ヶ丘天徳園（仙台ホーム）、昭和二十五年（一九五〇）鹿児島ラ・サール学園、昭和三十五年（一九六〇）函館ラ・サール高校設立と本邦におけるラ・サール会は発展してきたのであります。この様な歴史の中で、私達函館ラ・サール高校も一万二千名を越える同窓生が誕生しております。「あなたは同窓生として、何が出来ますか？」とお互いの価値観等はしたくはありませんが、各々が出来る範囲で、貧困者や弱者に何かしらの援助の手を差しのべるべきです。そのような生活をおくつてこそ初めて、ラ・サール高校同窓生と呼ばれるのに相応しい人と思うのですが。



函館ラ・サール高校校長
同窓会名誉会長

ブラザー
フェルミン・マルチネス

四人の開拓者へ、感謝！

今から七十五年前の十月二十二日、この小さな函館の港にはるる四人のカナダ人は辿り着きました。その四人はラ・サール会修道士と呼ばれた開拓者でした。実は当時、この四人を迎えてくださったカナダ人の神父様は彼らを「モン・フレール」と呼ばれたに違いありません。「モン・フレール」という意味は「兄弟」です。これは、カナダ人同士の関係の言葉でなく、聖ラ・サール自身が（一六五一年四月三十日誕生）L'INSTITUTE DES FRERES DES ECOLES CHRETIENNES

（現在、宗教学法として正しい名は「クリスト教学校修士会」であり、一般的には「ラ・サール会」と呼ばれています）を創立された時、「FRERES」という言葉を強調されていたのです。それで神父様は「修道士」という言葉を使わず「兄弟」と呼ばれた可能性が高いと思われれます。七五年前の函館と現在の函館の状況を比べますと当然のことながら、様々な面で随分、違うことと思います。今、突然、私たちも一緒にこの四人の「兄弟」と映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー」のように一九三二年十月二十二日の秋晴れの空からこの函館を見ることができたら、どのような印象を受けることでしょうか。彼らのように、この町で「ラ・サールの学校」を建てようという気持ち

強くなるでしょうか。彼らはこの町で、「ラ・サールの学校」を開校するために派遣されたので、神様に祈りながら心と力を合わせながら上陸されました。そのような彼らの祈りと希望を私たちも感ずることができるような気がしませんか。こんな立派な三十代の兄弟の素晴らしい熱意のお陰で、私たちは函館でラ・サールアンになることができました。

さて、その十月二十二日から、彼らには困難な日常生活が待ち受けていました。リゴリー、ダニエル、ロランとマルセル先生は四人とも、日本語をゼロから学び始めたし、仕事としては宮前町教会の聖歌隊を指導、そして教会の掃除、もしくは家事も含めて四年間の日々でした。

しかしながら、マルセル先生は二年後の一九三四年によく、本校の土地を購入出来ました。今、本校のキャンパスの広さを見ると本当にありがたい気持ち一杯になります。当時、カナダにはラ・サールの学校はたくさんあったようですが、しかし、どの学校も函館ラ・サールの土地の広さと比べることが出来ないようなもつと簡単に小さなものだったそうです。「兄弟」のビジョンの中で自分たちのカナダ人の子供より日本人のために一番ふさわしい学校を捧げようという意向があったと思われれます。そして、その後ご存知のように国際情勢の悪化のため、ほとんど何もできずに、失意のうち一九三六年に仙台へ移動。第二次世界大戦が勃発し、彼らは抑留され、本格的な取り組みは終戦後を待たねばなりません。そうして、一九三二年に初めて来日し、修院を開いた函館の地に、

幸いにも、ついに一九六〇年に我が校が誕生したのです。

今、このように函館ラ・サールの歴史を振り返るとき、私たち自身に対しても次のような問いかけをしてみることが意義のあることと思います。「私たちは卒業生として、母校のために何ができるのでしょうか。」あるいは「七十五年前の開拓者の兄弟のように他の国のために何ができるのでしょうか。」と。

「ハタチ?」…来日二十周年に際して



私は、一九八七年九月二十六日（土）の真夏の日に日本で再誕生しました。

実は、今から二十年前のその日が、私の初来日の日でした。メキシコシティ空港から出発して、ロセンゼルス経由で、台湾まで行き、翌朝、羽田まで飛んでまいりました。羽田空港のロビーから出た途端、ものすごく熱い真夏の空気が私の顔を打ちましたその時、私が赤ん坊として生れた時に感じたであろうものと、再び、全く同じ気持ちで神様から頂いたものだと思います。振り返ってみると、この二十年のあいだ、私にとり皆様との新しい出会いによって私の人生も変わってきました。日本のラ・サールファミリーの皆様お陰で、私の精神的な親戚が増え、そのことにより、一層の幸せを感じられる様になりました。どうぞ今後とも宜しくお願い致します。（写真の胸章は同窓会からの記念品です。ラベル理事長にも同様の品が贈られました。）

七十七歳の祝い

函館ラ・サール学園理事長
ブラザー アンドロレ・ラベル



この二年間は私の人生にとって重要な年月でした。二〇〇五年、ラ・サール会の修道士として終生誓願五十年を祝いましたし、二〇〇六年は来日五十周年の年でした。日本にいるブラザーの方々、学校の先生方、そして函館と鹿児島島の同窓会はこの出来事をお祝いしてくださいました。心から感謝している次第です。そしてまた今年、驚いたことですが、二〇〇七年は新しい祝いの年となりました。〇七年は新しい祝いの年となりました。生まれて七十七年、日本という喜寿の祝いです。このことは日本にいなければ、祝うことはないでしょう。カナダでは七十七歳は特別の年齢ではありません。文化的にも伝統的にもそうしたことはないのです。

函館の同窓会は年度の総会で親切なお遣いをくださり、素晴らしい記念品をくださいました。皆さま全員に、特に役員の方々に、こうしたご親切に対して心より感謝申し上げます。私にとって、大きな励ましとなりました。そして、私の新しい目標は？八十八歳の米寿まで、できることならこの函館で生活することです。この町は私にとって魅力的な、美しい、友情と平和の町だからです。これからもどうぞ宜しくお願い致します。

卒業生の皆様へ——ホルヘ管区長からのメッセージ

これからの日本の将来のために

ラ・サール修道会、日本デレグーション管区長 **ホルヘ・ガヤルド・デ・アルバ**

ラ・サリアンの皆様

今年十月十九日に、わたしたちラ・サール会員は、ラ・サール会来日七十五周年記念を祝賀することになっていました。来日当初から現在に到るまで、様々な場所と分野で教育者としての務めを果たしてきましたが、常に協力していただいた方々、職員、父兄、卒業生、すなわちラ・サリアンの皆さんと共に起伏の多い歴史を分かち合いながら今日に至りました。

現在、日本のラ・サールの活動としては、学校と児童養護施設合わせて三つの施設が仙台・鹿児島・函館の各都市で目覚ましい特色ある人間教育センターとして活動していますが、それぞれ創立以来五十九年・五十七年・四十七年を経過した現在、日本社会において素晴らしい評価を得ていることは、これらラ・サリアンの各施設の創設以来運営にあたってきた数々の教職員の方々が重要な役割を担ってくださったおかげであると認識しています。わたしたちブラザーは、自分たちの限界が、ラ・サリアンの愛情によって大いに補われていることを自覚しています。

わたしたちの三つの学校・施設の中では、わたしたちに託された生徒・児童に対する最善の教育と養育のための熱意と協力的な努力の伝統が維持されています。

また、学校運営組織は、中間管理職を含めて九十八・六%がブラザーではないラ・サリアンの人たちによって構成されていますが、この事実が日本におけるラ・サリアンの使命が来るべき七十五周年どころか百周年を越えても継続されて行くことを示していると考えています。

現在、日本にはブラザーが十三名おり、彼らは三つの修道院に居住しています。わたしたちは比較的元気で健康であるし、四月から入会したい若い日本人の教師は志願者としてそういう準備を始める予定ですので割合に希望が持てる視野で将来に立ち向うことができると思いますが、実際に学校や施設で専任の仕事に携わっているブラザーは五名に過ぎません。この五名の中で三名は校長または園長で、他の二名が専任教諭です。この人数を考えた時、十年後に修道士の人員が増えていることは期待出来ません。

このような現状の中にいるわたしたちブラザーは自分たちの存在が日本の中で虚弱な立場にあるということを意識しています。このような現状が永久に続くとは思えません。わたしたちは是非居た方がよいと思われる場合は、最大限の努力をしてブラザーの修道院を維持して函館、仙台、及び鹿児島での正規の仕事に携わって行きたいと考えております。わたしたちブラザーは、自分たちの存在の意味

を学校や福祉施設の中で考えてきました。そしてわたしたちは、将来ブラザーの管理職がいなくなっても、日本人管理者を支え、ブラザーの修道院も維持して学校や施設運営の仕事に携わって行きたいと考えています。

しかし、このように学校や施設でブラザーの人数が減少している状態で、果たしてブラザーはどのような活動が出来るのでしょうか。この質問にお答えするには、以下のようにブラザーたちのヴィジョンについて説明する必要があります。わたしたちブラザーは日本における使命実現のために次の五つの方針を前提としています。共同体の証し・人間的キリスト教的教育による奉仕・貧者への優先的奉仕・連帯・FSC = Faith, Service, Community がそれです。

● 共同体の証し

わたしたちは仕事を個人としてではなく共同体として行います。共同生活はブラザーにとって本質的要素であり、そのために修道院が校内に設置されています。

● 人間的キリスト教的教育による奉仕

さかのぼると一九三二年、初めてラ・サールのブラザーが日本に来た時、わたしたちは函館で学校を創立するように日本のカトリック司教の招聘を受けました。もともとわたしたちは若者にバラ

同管区長は、近日中に日本での任務を離れて、ローマのラ・サール会本部に異動されます。

スの取れた教育を行うためのカトリックの教育者として参りました。それは人間的学術的スキルと同様にキリスト教精神普及の要請に応えるためでもあります。

様々な問題で函館では二十七年後に初めて学校を開設することができましたがその間、仙台、及び鹿児島でそれぞれに社会福祉施設と学校を開設して来ましたがこの場所にもその地区のカトリック司教の招きで創立されました。

● 貧者への優先的奉仕

十七世紀ヨーロッパにおけるわたしたちの原点から考えても、困窮している人たちに配慮・奉仕することは現代に至るまでわたしたちにとっての重要課題であり、それは日本のわたしたちの学校や福祉施設においても同様です。

仙台におきましては、ラ・サール・ホームは日本の土地に最初に根を下ろしたラ・サリアンの施設であり、第二次世界大戦直後に戦災孤児の収容が緊急課題であるときに設立され、全般的な経済事情の回復に伴い機能不全過程の子どもたちを収容するようになりました。

一九四九年に鹿児島でラ・サール学園が創立された時代は、戦後の荒廃した状況の中で人々は苦難に耐えており、国的社会的経済的復興を考慮しなくても教育的分野は最優先的課題の一つでありました。

函館におきましても、一九三二年始めて日本に参りました時、あるいは一九五九年の本校創立時においても国家、特にその最北端地方の社会的経済的再建のための主たる関心は教育の必要性でありました。

こうして困窮者への優先的奉仕の実践がラ・サール修道会の来日、そしてラ・サール・ホーム、ラ・サール学園、および函館ラ・サール学園開設の由来となっております。わたしたちの起源にさかのぼる貧者への奉仕に対する呼びかけは、現代でも社会的な困窮や自信喪失に悩む生徒たちに関心が向けられるべきであるとわたしたちは理解しております。

●連帯

わたしたちブラザーは連帯の誓願を立てています。それはわたしたちの使徒的活動をグループとして修道士の共同体として行うことを約束するもので、現在もこの誓願を維持していますが、一九八〇年以来、わたしたちはこの誓願の意味内容を広げて、ラサリアン協力者の方々と一緒に共通の使命を遂行するようになりました。それ以来皆さんも「ラサリアンファミリー」、「使命の分かち合い」、「使命のための連帯」などの標語を耳にするようになったと思いますが、これら全ては若者への教育と学校の運営における相互協力と相互責任の精神を強調しようとしているものであります。

●FSC (Faith = 信仰、Service = 奉仕、Community = 共同体)

わたしたちはこの3つの要素がわたしたちの行動を起こさせる全ての理念を支える柱であると見なしており、この3つ

がわたしたちの社会的な役目を統合しています。わたしたちは信仰に駆り立てられて共同体を形成し、神から委託された若者たちの生活を変革出来るものと信じています。

これら五つの要素は日本デレゲーション使命宣言の中核をなすものです。わたしたちの修道士グループにおけるこの五つの要素は一度でもラ・サールと関係があった方々、職員、父兄、生徒、特に卒業生一人一人の中に浸透してラ・サール精神の特色を与えていると思えますが、わたしたち修道士は、皆さんに向けたこの五つの精神の紹介や育成に関して、もっと積極的に伝えるように働かなければならないのではないかと反省しております。

さらに、学校・施設の運営の将来について考えますと、今までそのリーダーシップはいつも一人のブラザーが持っていました。わたしたちは現在の学校・施設の運営やリーダーシップが最早ブラザーたちの責任だけでなされるものではないし、もし職員が現在よりも重い段階のリーダーシップを担ってくださるならば、ブラザーたちは生徒たちにもっと接近し、また教職員の方々に対しても、もっとラサリアン・スピリットの紹介・促進を可能にすることが出来るのではないかと考えます。同時に卒業生はラ・サール会及びその創立者、聖ラ・サールについて関心が持てば持つほど、母校の将来にもっと効力のある参加ができると確信しております。

個人的に申しますと同窓会との関係が深まったのは割合に最近のことですが、

この短い期間で皆さんの本会に対する献身や支えを確認することができました。いくつかのレベルで例を挙げますと、まず、石井修道士が「丘を下っていった人」聖ラ・サールの生涯」という本を書いた理由は、聖ラ・サールについてもっと知りたいという卒業生の依頼にこたえるためでした。本の編集や発行は卒業生の応援や努力がなければ出来なかったに違いないと思えます。その本にラサリアンの知恵、及び自分の人生を考える機会を見つけられると思えます。

全国のレベルを考えると、函館・鹿児島・大阪、名古屋、仙台、福岡、など）でだんだんお互いに協力し合ったり、一緒に共同計画を立てたりする機会を作るように積極的に努力なさっていると思えます。国内だけではなく、海外でも日本のラサリアンは国際同窓会に参加したり、他のラサリアン学校・施設、特に東南アジアやアフリカの恵まれていない子供たちに援助の手を差し伸べたりしており、修道会から見ると非常に好ましい方針と見えます。なぜかというところ、活動により母校で学んだ「ファミリー・スピリット」を本当に活かしていると思うからです。

わたしたち、ブラザーは上記の同窓生の活動やそういうようなイニシアチブを続けるように祈っています。そういう道を歩み続けられ続けるほど、ブラザーたちの人数が減少しても、またその影響が薄くなっても、卒業生の皆さんのおかげで、日本で卒業生が一人でも居るところにはどこにでもラ・サールの花を咲かせ

られると思えます。

内部的なことを申し上げますと、ラサリアンの世界では、管理体制の再編成プロセスも進行中です。昔の卒業生の方々はご存知のことですが、日本管区は以前はカナダに所属していましたが、一九九〇年以来、日本管区はローマ直属のデレゲーションという機構となり、会員はメキシコから補充されるようになりました。現在では、アジア太平洋地区にある日本・タイ・ベトナム・オーストラリア、パキスタンの五地域を統合しようという企画が進行中です。まだ何も決まっていますが、機構変革のこの種の課題はわたしたちの学校・施設にも何等かの直接的影響を与えるものと思えます。協力者である卒業生の皆さんもこのような機構変革に関する情報には関心を持って頂きたいと思えます。

今まで申し述べました全ての問題は結局一つの呼びかけを志向しています。それは今まで「ブラザーたちだけのこと」と見なされていた諸問題に、是非ともこれからは、皆さんにもっと関与していただきたいということ。ラサリアンの使命は卒業生の責任でもあり、皆さん一人ひとりが担って頂きたいと考えています。

日本におけるラサリアン精神の未来は皆さんの手の中にあります。皆さんのラサリアン精神の体得によってわたしたち十三名のブラザーも、現在の二万名以上の鹿児島・函館の卒業生の力を与えていただけるものと考えています。

ド・ラ・サールの内に共に歩いて



2007.8.25

函館ロイヤルホテル

平成19年度 事業報告

平成18年	
9月 2日	西日本支部総会 出席/齊藤会長、星野事務局次長
9月 9日	札幌支部総会 出席/佐藤副会長
9月 26日	第1回同窓会役員会(ロイヤルホテル)
10月 6日	東北支部設立総会 出席/齊藤会長、清水事務局次長、星野事務局次長
11月 2日	追悼式 出席/齊藤会長
11月 15日	会報第7号発行
11月 30日	奨学生選考会
12月 12日	同窓会総会
12月 15日	クリスマス会 出席/佐藤副会長
12月 22日	第2回同窓会役員会(ロイヤルホテル)
平成19年	
1月 31日	同窓会入会式
2月 1日	高校卒業式 出席/齊藤会長
3月 2日	ハイチへの寄付(50万円) 仙台ラ・サールホームへの寄付(50万円)
3月 20日	第3回同窓会役員会
4月 3日	入学式 出席/齊藤会長
4月 21日	東京支部総会 出席/渡辺顧問
5月 22日	同窓会奨学金選考会 出席/齊藤会長、清水事務局次長
6月 15日	第4回同窓会役員会
7月 13日	拡大役員会(総会に向けての準備会)
7月 21日	学園祭/パーズ出店(～22日)
8月 7日	第5回同窓会役員会
8月 25日	第6回同窓会役員会 同窓会総会

平成19年度 会計報告

一般会計 (円)	
収入の部	
A. 前年度繰越金	5,078,519
B. 同窓会会費(45回生)(34,600円×209名)	7,231,400
C. 同窓会会員名簿売上(4,000円×11冊)	43,690
D. 『丘を下っていった人』売上げ	4,000
E. 同窓会グッズ売上げ	126,950
F. 学園祭模擬店純益	40,639
G. 受け取り利息	2,148
合 計(A)	12,527,346
支出の部	
A. 会報	1,069,924
B. 同窓会名簿データ保守・管理	128,835
C. 総会補助(平成17年8月)	259,901
D. 卒業証書フォルダー	0
E. 支部運営費	1,602,070
F. 会議費補助(9回)	298,041
G. ホームページ運営費(平成17年度)	252,315
H. 支部総会への出席	411,830
I. 奨学金運用資金への補助	2,140,000
J. 寄付(ラ・サールホームとハイチ)	1,500,630
K. 諸会合・式への出席	144,715
L. 郵送料	2,960
M. 慶弔費	99,465
N. その他	339,340
合 計(B)	8,250,026
次年度繰越金 (A)-(B)=4,277,320	

奨学会会計	
ラ・サール奨学基金	30,000,000
創立30周年記念事業費[728名]	9,542,021

平成18年度給付分(平成18年12月支給)	
収入の部	
1. 前年度繰越金	2,437
2. 基金の平成18年度利息	10,403
3. 一般会計からの補助(平成18年度分)	710,000
合 計(A)	722,840
支出の部	
1. 平成18年度給付分(12万円×6名)	720,000
合 計(B)	720,000
次年度繰越金 (A)-(B)=2,840	

平成19年度給付分(平成19年6月支給)	
収入の部	
1. 前年度繰越金	2,840
2. 基金の平成19年度利息	10,500
3. 一般会計からの補助(平成19年度分)	1,430,000
合 計(A)	722,840
支出の部	
1. 平成19年度給付分(24万円×6名)	1,400,000
合 計(B)	720,000
次年度繰越金 (A)-(B)=3,340	

特別会計	
I. 同窓会名簿(2003)作成時購入代金の回収分(2003年7月～2007年7月) 5,312,667 内訳/北洋銀行口座 488,337 郵便局口座 4,824,330	
II. 平成16年度一般会計剰余金からの定期預金 12,000,000	
III. 50周年事業口座 1,113,867	

監査報告
一般会計・奨学会会計ならびに特別会計ともに、監査の結果、諸帳簿も正しい執行されていることを認めます。
平成19年8月22日(水) 監査 島本 肇・永澤大樹

役員会(十五時) ●各支部からの役員(西日本支部・藪越さん、関東支部・秋好さん、東北支部・伊藤さん、札幌支部・坂本さん)を交えて開催。各支部の近況等の報告、総会の最終打ち合わせ、東北支部に対する支部活動助成金について等の審議がなされました。

講演会(十七時) ●講師は大誠さん(一期生) 元読売新聞記者 著書に「斎藤修平伝」箱館戦争人物伝「箱館戦争始末」にお願いいたしました。演題は「箱館戦争あれこれ」。地元函館にまつわる興味深い歴史の話ということで皆さん熱心に耳を傾けていました。(講演抄録掲載)

同窓会総会(十八時) ●黙祷の後、齊藤会長挨拶、フェルミン校長挨拶。次いで恒

例の定年退職職員への記念品贈呈が行われ、事務の野田さんへ贈られました。この後、議事に入り事業報告、会計報告、監査報告がなされ、拍手で承認されました。役員改選については、規約により、当同窓会の役員任期は2年と定められており、今年が改選期に当たります。清水事務局次長から新役員案が示され、参加者一同の拍手で承認されました。

懇親会(十八時四十五分) ●東北支部事務局長の伊藤さん(6期生)の祝杯の音頭でスタート。史上最多の百五十名を超える参加者となり、大盛会となりました。スピーチは今年見事に当選された、西尾函館市長(五期)、石川衆議院議員(三十期)に、まずしていただきました。次に、今年喜寿を迎えられたラベル先生、来日二十年周年のフェルミン校長にプレゼントが贈られ、それぞれスピーチをいただいた後、多数参加いただきました旧職員の方々から一言ずつ挨拶をいただきました。途中に関東支部制作のDVD上映を入れ、最後に宮崎先生の指揮で、学生歌、校歌を歌い、札幌支部幹事の坂本さん(十四期)の締め乾杯で大団円。



懇親会終了(二十時三十分) ●予定終了時間をかなりオーバーしましたが、多くの出会いと感動に満たされた総会は余韻を残しながら散会いたしました。皆さん、懇親会ですっかり良い気分となり、二次会へと各期ごとにグループとなって大門の夜の巷に消えていきました。

同窓会役員改選

会 長	齊藤 裕志 (5期生)	事務局次長	清水 昌明 (14期生)
副 会 長	佐古 一文 (2期生)	事務局次長	星野 裕 (5期生)
副 会 長	渡辺 敏明 (6期生)=新任	事務局次長	島本 肇 (8期生)
副 会 長	宮村 拓郎 (8期生)	事務局次長	川村 和男 (24期生)
副 会 長	佐藤 雅洋 (9期生)=新任	会 計	品田 義雄 (15期生)
副 会 長	塚谷 善次 (9期生)=新任	会 計	十文字 正樹 (26期生)
副 会 長	佐藤 友康 (12期生)	監 査	國谷 大輔 (28期生)=新任
副 会 長	和根崎直樹 (21期生)	監 査	永澤 大樹 (29期生)
副 会 長	宮永 雅己 (札幌支部会長・7期生)	顧 問	菅野 剛造 (1期生)
副 会 長	秋好 憲一 (東京支部会長・3期生)	顧 問	渡辺 良三 (4期生)
副 会 長	藪越 英昭 (西日本支部会長・4期生)		
副 会 長	馬場 亨 (東北支部会長・3期生)=新任		

お知らせ

来年の総会は8月23日(土)開催と決定しました。多数の方々のご参加を期待しています。

講演 箱館戦争あれこれ

歴史作家 大 誠 (1期)



■榎本武揚没後百年
皆さんご存知の箱館戦争の主役、脱走軍のドン・榎本武揚(たけあき)が明治四十一年(一九〇八年)十月、江戸で七十二歳で死去して今年でちょうど百回忌に当たります。箱館戦争勃発から今年は丸百三十九年、終結つまり箱館で新選組副長・土方歳三(としぞう)や中島三郎助父子が死んだのは翌年ですので丸百三十八年たつわけです。今日は百回忌の榎本を中心に、果たして榎本は五稜郭開城の際、本当に切腹して戦争の指導者たる責任を自ら果たそうとしたのかについてお話したい。定説は開城の前々夜、腹を切ろうとしたが部下に止められ、果たせなかつた、皆に説得されて切腹を思いとどまったというものです。

され、箱館湾海戦で脱走軍艦隊は全滅した。この日、土方は若松町付近で戦死しています。土方はもう俺のような刀で生きて来た人間の時代じゃねえ、実に鉄砲の時代なんだとさとした。そして千葉・流山で斬首された新選組局長・近藤勇のあとを追うため、箱館で突撃死したと思います。

■函館戦争総括

そして十六日、最後まで頑張っていた千代ヶ岡台場が落ち、中島父子が玉砕する。五稜郭内には約千人の幹部と城兵がいました。その人たちは恐らく皆「榎本総裁はまず真つ先にお腹を召されるだろう」と思っていたはず。蝦夷地までやってきた脱走軍のトップが降伏する際に命ごいしたては話になりません。新政府軍は新選組、近藤の首をわざわざ京都まで送ってさらし首にした。多くの薩長藩士を殺した新選組や二軍を率いて蝦夷地まで逃げた榎本らは新政府軍にとっては不倶戴天の敵で、榎本が助命される目はほぼ百分なかつたのです。脱走軍幹部たちも、総裁、我々が切腹して部下の助命を新政府軍に頼みましようとは言わない。総裁の首を差し出せば我々は助かるかもしれないと思っっている。城兵たちは今晩何人の幹部が腹を切るかひそひそ話し合ったかもしれない。出来るだけ多くが切つてくれれば、その下は助かる確率が高くなる……そんな疑心暗鬼が榎本総裁に一番重くのしかかつて来る。

■榎本切腹の真相

開城前々夜(明治二年五月十六日)の状況は榎本に実に厳しかった。十一日の新政府軍総攻撃によって箱館市中は敵に占領

結果的に榎本は切腹せず、新政府軍の黒田了介(のち清隆、第二代首相)が榎本助命に奔走し、最後は薩摩のドン西郷隆盛(今年がちょうど没後百三十年)の鶴の一

言で榎本は命を救われる。二年半、牢屋に入れられました。その後、敵だった明治新政府に就職して、黒田の引きでトントン出世し、大臣にまでなった。変節漢とやつかみ半分に指弾された榎本ですが、じゃあなぜ五稜郭で切腹しなかつたか。将来への先見性、洞察力は当時の軍人インテリでは群を抜いていました。何しろ若い時のオランダ留学で当時の欧州、軍隊、戦争をつぶさに見ている。オランダ語は当時の日本人で一番出来たでしょう。造船、航海術、蒸気機関、鋳物、冶金等の学問にも詳しい科学者の側面も持っている。自己の才能に強烈な自信を持っていて(俺がいなければ日本は回っていかない。これからの日本の指導者になりたい)と思つたでしょうね。負けいくさの箱館で腹を切るより、この窮地を脱して生き残るすべを探そうと思つた。総裁室で正座し、脇差を抜く。チョッキを開いて腹を出す。何度も伏しおがむようなくさをしてる。恐らく部下のだから心配してのぞくだらう、それまで我慢して待つていれ

優れた記録「シベリア日記」を残しています。今読んでも実にジャーナリスティックな、観察眼あふれた面白い文章です。筑摩書房の「世界ノンフィクション全集」の中に納められていますので、興味のある方は図書館から借りて読んでみて下さい。

■榎本の人物像

榎本は性格的にも一筋縄ではとらえ切れない複雑怪奇なところがある。どういう人間だったのか、私もへきえきする程の現代性を持っている。今の人間顔負けの機を見るに敏の鋭さを持っている。あなただが最後の夜、榎本の立場だったらあのように振舞えただろうか。榎本の行動を是とするか非とするか、榎本の人格性格をどう捉えるかで、箱館戦争の評価もまた変わって来る。榎本は死に場所を求めて箱館にきた。ハムレットの如く随分悩んだと思います。個人的には榎本、土方と違つて、余り悩むことなく徳川家に殉じた中島三郎助父子の生き方がすつきりして一善好きですね。果たして現代の我々に、命ささげて悔いなしにそれだけ価値のあるものがあるかどうか。皆さん、榎本百回忌を機に箱館戦争を見直し、もう一度、五稜郭、四稜郭、亀田八幡宮、旧千代ヶ岡台場、弁天台場、土方戦死の地などを巡つてはいかがでしょうか。

以上の話を詳しく書いた拙著「箱館戦争始末(副題・土方歳三の恋、千七百円)はまだ残部あります。購入希望の方は送料込み二千円を添え、東京都杉並区上荻二一七―二十五の筆者まで申し込んで下さい。

さて本日の総会で特筆すべきは、全期卒業アルバムDVD化に始まり、物販アイテムの選択、地元密着型テーマに係る各界OBによる鼎談、グリーククラブ有

志によるスピリチュアル・サウンド等々といった各種企画面における視覚・音楽情報の活用は、担当委員によるこの一年間のためめ研究と努力の結晶であり、その洗練された運営手法は、今後の新しい総会運営の指標となることを予感させるものです。

先ず総会では、平成十九年度の活動計画として、函館同窓会本部や鹿児島ラ・サール東京同窓会との連携継続に加え、新たに函館ラ・サール同窓会地方支部やP.T.A.関東支部との関係強化、又今後の世界や日本の未来に向けてOBとして如

何なる社会的貢献が可能かについて模索していく事が提言され、更には三年後に迫った母校五十周年記念事業に向けて母校並びに函館同窓会本部との連携強化が確認されました。

函館ラ・サール東京同窓会の会長を務めております三期の秋好憲一です。本日は遠く函館母校より、校務多忙の為ご出席頂けませんでしたがマルチネス校長や同窓会本部の会長・事務局長に代り、ホルへ管区長やラベル先生、前同窓会事務局長一期菅野剛造氏や前同窓会会長四期渡辺良三氏の両役員を始めとする恩師の諸先生方、更には鹿児島ラ・サール東京同窓会より黒木会長他多くの役員の皆様並びに会場に紅一点の華やかさを添えて頂いております函館ラ・サール学園P.T.A.関東支部役員の皆様方のご臨席を賜り、ここに盛大な総会を開催できました事を、深く感謝申し上げます。

これも偏に、貴重な時間を割いて本総会の企画・立案に携わって頂いたX七期運営委員の諸氏や事務局を始めとする多くの役員・OBによる真摯なご支援の賜物であり、ここに篤く御礼申し上げます。顧みれば十有余年前、一期と二期の諸先輩有志により発起された東京同窓会の萌芽は、当時のOB意識の未覚醒と組織基盤の脆弱さゆえに永らく休眠状態にありました。しかし沸々と燃えさかっていたラサリアンとしての情熱は一向に消えること無く、今度はより多くの卒業期同志の糾合を図ることにより、その衆知を結果し、今日の東京同窓会として結実するに至りました。その後、全卒業期を網羅した東京同窓会の組織強化と拡充に伴い、本日第七回目の東京同窓会総会を迎えることができました事は、非常に感慨深いものがあります。これも過去に深い井戸を掘って頂いた一期の諸先輩からの贈り物と存じ、衷心より御礼申し上げます。

平成十九年四月二十一日(土)第七回函館ラ・サール東京同窓会総会が、箱崎のロイヤルパークホテルに於いて、来賓並びに同窓生を合わせ二百八十七名の参加を得て盛大に開催されました。今回の総会は、七期総会実行委員会による一年間に亘る入念な準備の下、『ラ・サール精神(スピリット)と時代/社会との出会い』というテーマで企画されましたが、総会当日は熟成されたモルトの馥郁たる香りが会場を包み、参加者の五感を徹底的に痺れさせたという表現がびつたりの内容でした。

一方ロビーでは、懐かしい北海道の海産物・農産物・ワインといった特産品や、特別企画として自主制作された「映像演出と卒業アルバム」のDVDも販売され、これも大好評を博しました。



東京同窓会会長
秋好憲一(三期)

東京支部
2007.4.21



出発点かと存じます。就いては、一期から三期の諸先輩・諸兄並びにこれから還暦を迎える諸氏にお願いがございます。今後はラサリアンの紐帯として、社会生活の中で得られたその貴重な知識や経験を、社会的利害や上下関係とは無縁な同窓会活動に是非役立てて頂きたく、今後ともご支援方宜しくお願い申し上げます。

この後の懇親会でも、冒頭のテーマが一貫して会場内に横溢し、特に映像演出『風に吹かれて』ラ・サール学園五十周年の精神史』や音楽演出『スピリチュアル・サウンド』グリーククラブの歌声』という形で浮き彫りにされた時は大喝采を浴びました。

続いて行われたOB講演会では、吉澤前北海道副知事・菊池北海道新聞社社長・谷藤早稲田大学政経学部教授お三方による鼎談『北海道再生—今、緊急課題に對し、それぞれの立場から提言する—』が開催されましたが、母校が送り出した俊英による北海道再生への熱き論戦が展開され、参加者は暫し北海道の未来に思いを馳せました。

東京同窓会 第七回総会開催される

東京同窓会事務局長 宇野哲人(六期)

二〇〇七年総会記念講演会
鼎談「北海道再生への道筋—今、明日の北海道を語ろう—」

講演者

北海道新聞社社長 菊池育夫(二期生)

北海道新聞社社長 吉澤慶信(二期生)

早稲田大学政経学部教授 谷藤悦史(七期生)

司会者

株式会社アイティ代表取締役 三島 卓(七期生)

北の大地・北海道の経済は、今年三月の夕張市破産問題(財政再建団体認定)に象徴されるように、従来農林水産業と並んで北海道の基幹産業の一つであった石炭産業の崩壊、北洋漁業や林業といった第一次産業の衰退等と相俟って、所謂パ

ブル経済崩壊後ほぼ十五年以上に亘る構造的経済不況にあえいでおります。この間、国からの各種補助金・交付金といった借入金や地方債発行による債務は、現在道民の大きな負担となって重くのしかかっておりますが、この現象は北海道ばかりではありません。赤字国債や地方債の乱発等に起因した著しい累積債務超過に苦しんでいる国や全国の地方自治体においても同様な現況を呈しております。

このような閉塞状況を打破する手段の一として、地方への権限委譲、地方分権制の再論議が高まってきました。また記憶に新しい二〇〇三年衆議院選挙の際、当時の小泉首相により提唱された「三位一体改革」(国から地方への補助金・負担金の廃止・縮減、地方への税源移譲、地方交付税の見直し)というスローガン下での道州制検討は、戦前から消長を繰

り返してきた議論の一つであります。現行の地方自治法と行政権や立法権との法的整理並びに憲法改正に波及する本質的問題を包含しているだけに、制度自体の概念は全く定まっておられません。しかし、明治時代より永年続いてきた国・都道府県・市町村制という中央集権的枠組みを遵守することなく、あくまでも道州制を一つの選択肢とした位置付けの中で、国家の在り方を模索しようというこの包括的論議は、今日の研究・検討課題の一つであります。

東京支部

二〇〇八年東京同窓会の概要が決定しました

東京支部では来年の総会に向けて、X八期を中心に実行委員会を立ち上げました。開催日時は六月二十一日(土)午後三時より、会場はロイヤルパークホテル、会費一万円(学生五千円)とし、講演会は小田原修君(八期、東京工業大学院総合理工学研究所教授)、友田哲雄君(八期、元金谷ホテル観光株式会社社長)を予定しております。また、懇親会ではグリーンクラブOBによる公演、寺下誠君(八期、ジャズピアノリスト)が参加の予定です。

津田洋行元教諭(現明治大学教授)など懐かしい恩師の先生方をお招きし、盛大かつ楽しい同窓会を目指しております。卒業生の著書紹介・販売も計画しています。なお、実行委員会では現在八期が中心となっておりますが、十八期、二十八期、三十八期の皆さんにもご協力をお願いしております。

西日本支部

2007.9.8



西日本支部 支部長
藪越英昭(四期)

九月八日(土)第九回西日本支部同窓会が無事終了しました。フェルミン・マルチネス校長先生が所用のため出席できず、代わってアンドレ・ラベル前校長先生にご出席をお願いし、快く出席をいただきました。また函館本部から齊藤同窓会会長、鹿児島ラ・サールから笛吹大坂支部支部長、PTAから加藤支部長にもご出席を頂戴し、三十名の皆様が出席してくれました。ご出席をいただいた多数の同窓生の皆様に対して、心よりお礼を申し上げます。今年度は会場を大阪に移しヒルトンホテル大阪にて開催しました。チャペルを使用しての追悼式でスタート、追悼式の司会をいつものようにラベル先生にお願いをしました。今回は一九三二年に函館にやって来た四人のラ・サール会修道士をチャペルに飾り、ラ・サールに関係する人間全ての追悼式となりました。記念写真に続き、総会、懇親会へと移りました。齊藤会長の挨拶の中でラ・サリアンとして五つの課題に関してのお話は全員が共鳴し、今後の同窓会の指針ともなったような気がします。懇親会では幹事の八期丸木さんのギター演奏、ビンゴゲーム、そして全員が近況報告を行い、最後に今年喜寿(七十七歳)を迎えられたラベル先生に贈り物をさせていただきます。ラベル先生からは「米寿

(八十八歳)までは頑張ります。」とお言葉があり、有意義な楽しいひと時を皆で共有できたことは何事にも変えがたい同窓会であったことと確信いたします。

東北支部

2007.10.6



東北支部 事務局長
伊藤恒敏(六期)

昨年、函館ラ・サール高校同窓会の東北支部として同窓会本部にも認知していただき、名前を連ねることになりました。本部から助成金もいただけるようになりました。昨年は何しろ、慌ただしく、東北支部を設立、総会を開催し、とりあえず形を作ったと言うところでした。今年度は比較的早期から支部総会が第二回になることもあり、きちんとした総会にしよう馬場亭会長(三回生)はじめ、小笠原博信(二十六回生)事務局補佐ともども努力して参りました。努力したことの一つは名簿の整理です。同窓会本部から昨年、約五百名の名簿をいただいております。まず、これをデータベース化し、いつでも必要な項目が検索できるようにいたしました。この名簿を今後はアップデートなものにしていかなければなりません。五百名の支部会員に対し、当然ではあります、事務局は無給で同窓会の仕事をこなすわけですから、一気に問題解決というわけにはいきません。これから四、五年かけて連絡を何度も行い、行事への参加を促し、そうした地道な活動の中でしか、実質充実

することはできないと考えています。

二つ目の目標は総会への出席者数をどのように増加させてゆかかということでした。昨年はまだ、急な設立総会、ということ、総会の参加者が少ない場合でも事務局の方には最初から充分言い訳をする材料はありました。しかしながら、今年度は第二回目です。同じ言い訳が通るとは考えられませんでした。そこで、函館ラ・サール高校の校長先生への出席をご依頼し、また、昨年同様同窓会会長と事務局に出席をお願いし、一方では同窓会支部総会としての形を整えることに精一杯の配慮をいたしました。

残念なことではありましたが、マルチネス校長先生はご予定があり、出席を賜ることは適いませんでしたが、仙台ラ・サールホームからテレビーニョ園長先生、それにラ・サールホームの理事長を引退された石井恭一先生のご出席をいただきました。特に石井先生はご高齢で体調が充分ではありませんでしたが、わざわざ駆けつけて下さいました。函館の同窓会本部からは昨年に引き続き齊藤会長と清水事務局長においでいただきました。皆様には総会でご挨拶もいただきました。

総会も、支部会員の中から講演をいただくとうと五回生の浅井泰博氏（住友信託銀行勤務）から「遺言を書くことの大切さ」という題でお話がありました。日常、「遺言」を考えることもない我々には遺言が大事だと思ふ反面、人間関係の深遠で複雑なことにも感心してしまう講演でした。東北支部にも錚々たる方々がいらつしやいますので、今後もこの講演は続けていきたいと考えております。

このあと、懇親会へと会場を移して大変和やかな熱気のある雰囲気です。懇談が行われ、懇親会のお開きには本部事務局長の清水先生指揮の下、学生歌と日吉の丘の校歌を皆さんで肩を組みながら斉唱しました。おそらく出席された方々の胸には往時を思い出して、改めて同窓というのがどんなものであるのか、という肌を滲みだした感想を持たれたのではないかと、と独りよがりに近い「自己評価」を、皆さんが去ったあとの懇親会場でひとり思いにふけりました。今後は出席者数をもっと増やし、函館からも恩師をお招きするなど、同窓会としての形の充実を期して行きたいと考えております。

忘れてならないのは、東北支部の活動の重点の一つがラ・サールホームの支援であることです。東北支部に変身する以前から仙台ではラ・サールホームへ毎年別途に寄附を募り、集まった分を差し上げてきました。昨年も二十万円の皆様からのお気持ちを届けたいとしました。今年もこのための会員連絡を差し上げなければならぬ季節となりました。東北支部が、ラ・サールホームが長く限り続けられるべき活動だと考えています。

本年八月二十五日には函館での本部同窓会総会に東北支部の代表として参加いたしました。小生は六回生ですからまだ同窓会総会の集まりが二十〜三十人ぐらいたった頃を覚えております。今年には約百五十名の参加だそうですので、まさに隔世の感じがありました。函館市長始め多くの著名になられた同窓生の参加もあり、旧交を温める機会ともなり、還暦の前に多くの感動をもらって帰って来まし

た。今後の東北支部の活動に少しでも還元できればと思っております。

東北支部はまだ歩き出したばかりですが、全国の同窓生の皆さん、今後ともよろしく願い申し上げます。

札幌支部 2007.9.15



札幌支部同窓会 会長
宮永雅己(七期)

札幌支部では、昨年一年間をかけて支部体制の強化に努めて参りました。各期の代表幹事を構成員とする幹事会を二ヶ月毎に開催し、平成十九年度札幌支部同窓会（総会）の準備を、担当幹事期X四期の皆様方と共に進めて参りました。本年八月末には、新聞紙上において同窓会開催を広報し、同窓会札幌支部の存在を広く告知するに至ったと考えております。

今年と同窓会の企画、運営を担当された四期、十四期、二十四期の皆様方のご尽力により、去る九月十五日（土）の札幌同窓会（札幌センチューリローヤルホテル）では、ご来賓として母校からアン・ドレ・ラベル理事長と村本直人先生、函館同窓会本部から星野 裕様（五期）のご出席を賜り、お蔭様で大学在学中のOBも含め百五十名の同窓生にご参集頂き、楽しい一時を共有することができ、喜びにたえません。大盛会のうちに本年度の札幌支部同窓会を無事終了することができまして、ご参加頂きました同窓生の皆様、及び幹事担当期の皆様方に心より深く感謝申し上げます。

恒例となりました講演会では、三十期の石川知裕氏（衆議院議員／民主党）に講演をお願い致しまして、常人にはなかなか知りえ得ぬ政界の実情の一端を軽妙な語り口にて、時にはユーモアを交えてご披露戴きました。快くお引き受け戴き誠に有難うございました。支部総会では、例年の会計報告に加えて、会則の一部変更、役員人事（事務局体制の強化）及び事業計画についてご承認を頂きました。また、今年の総会におきましては、

「創立五十週年」を迎える母校の実状に対処すべく、特別委員会として「五十周年記念委員会」の立ち上げを事業決定、五十周年に向けた体制作りに着手致しました。この委員会を起点として、函館本部や各支部の皆様方と歩調を合わせながら、五十周年に向けた動きを加速させて参りたいと念願致しております。更に、各支部や母校のPTA会との交流を密にする為、函館同窓会本部や各支部が開催する同窓会（総会）への役員派遣やPTA会札幌支部の会合への役員派遣についても、正規事業として決定しております。

一方、札幌支部の同窓生相互の親睦や交流を深める為の新規事業として、今年度は手始めに「親睦ゴルフ大会」や「新そば堪能の会」を予定しており、同窓会札幌支部としての内容を一層充実して参ります。来年の札幌支部同窓会（総会）の企画、運営を担当して頂く幹事期は、X五期の皆様方となりますが、新体制の事務局と連携して今後も母校の五十周年に向けて皆様方のご理解、ご協力を頂きながら、母校、及び札幌支部を盛り上げて参る所存でおります。

投稿

こんにちは市長をしています

函館市長
西尾 正 範
(5期)



昨年暮、故あって三十三年九カ月勤めた市役所を退職し、結果、選挙に立候補

することに、この春から市長の職に就かせていただきました。応援くださったラ・サール関係者をはじめ多くのみなさんに心からの感謝を持って仕事をしています。

市の助役辞任ということで、世間を騒がせてしまいましたが、いの一番に駆けつけて、「お前、これからどうするんだ！」と心配してくれたのは、ラ・サールの仲間達で、普段はあまり意識したことがない四十年来の友人のありがたみを痛感する一瞬でした。しかし、一瞬は一瞬のことであって、選挙に出るとなればそう簡単なものでない！時間もない！公約は？資金は？事務所は？運動員は？。何よりも、誰か公職選挙法を読んだことはあるのか？誰もいない！。仲間は皆、一定の社会的地位にあるんだし、反乱軍のように鎮圧されれば、みんな函館の業界の中で気まづくなるよ…。

こんなやり取りから始まった選挙戦は、まさに暗中模索のハチャメチャでしたが、「勝ち負けはどうでも、とにかく明るくやろうや」の言葉で、結構みんな楽しんで

でいたと、今にして思います。高校時代の社会科学研究会といったクラブ活動のように…。

そう振り返れば、僕が立候補することで、彼らに再び青春時代を取り戻してあげたとも言えます。(責任感とストレスから差し入れのお菓子を食べ過ぎて急性の糖尿病になってしまった友、僕の選挙活動のために公の役職を投げ出すはめになった友には誠に申し訳ないですが)

たくさんの仲間が集まってきてくれました。同期ばかりでなく、先生・先輩・後輩、市役所のかつての同僚・友人、市民団体の方達、ボランティアの方達、それぞれ脈絡のない素人の混合集団で事務所が出来上がりました。皆、知らない同士、当然、気を遣います。しかし、お互いが段々と打ち解けて尊敬しあう関係になってきた時が、お祭りのように一番の嬉しい時でした。

考えてみれば、かつて同期の中で僕がリーダーであったためしは一度もなく、いつも脇にいるか後ろについているか程度の存在でした。期せずして僕が中心になってしまった事務所、同期の連中から「お前もだてに市役所に長くいたわけでないな、本当に良い友達をつくっている」とほめられたり、友人達から「さすがラ・サールの連中はたいしたものだ！」と言ってもらった時が、「どんなもんだ！」と自慢したくなる至福の時であったと思います。

悲しい出来事もありました。同期の中で最初に函館に帰ってきて以来、同期生や後輩の面倒をみながら皆をまとめてきた親友の死。病に侵された体をおして杖

をつきながら立起要請に來たうえ、家族にせがんで事務所に何度も足を運んできた彼。奥さんからは「西尾はどうしたとるささいから。家族のことではなく友人のことばかりを言っているで嫉妬を感じた」と言われて、「じゃあ、写真を持って選挙に行きますから」とお詫びをしました。

人の死ほど重いものはないので、勝敗ごときはどうでも、やるべきことをやるだけと、全ての勇気を写真になった親友が与えてくれたものと思っています。

来年度は我々五期生も還暦を迎えます。友人達に支えられて嵐のような選挙戦をくぐって感じたことは、人の人生観や関係観は十八歳の頃に出来上がっていて、その後様々な体験があっても原点はほとんど変わることがないのではという思いでした。

政治は権力闘争ですから、勇気や俠気ばかりか、熱情や狂気による破壊の欲求を孕んだほんの一時の争いに過ぎません。行政はもう少しスパンの長い・忍耐のいる建設的な営みです。しかし、それとて最近のころころ変わる国政や地方行政からは、息長い営みとは思えるべくもありません。人の人生観や関係観の原点をつくる教育こそが、永久的に繰り返す価値の営みであると思います。

近頃は、同窓会の齊藤会長から、七十五年前に四人のブラザーが函館にやってきて学校を創ろうとしたこと、その結果として我々のラ・サール高校があることこの恩に報いるためにも、そろそろ我々も地域から貢献していかなければ、と言われ続けてきています。

何が出来るかはこれからですが、まずこれから百年・千年と続く素晴らしいラ・サール高校の発展と、たくさんの方々の後輩たちのより良い人生を祈って、筆を置きます。ありがとうございました。

投稿

内閣総理大臣表彰「再チャレンジ支援功労者」を受けて

北海道ネイチャーセンター代表
坂本 昌彦
(14期)



今年の六月二十六日に総理官邸にて、標記の「再チャレンジ支援功労者表彰」を安倍首相から直接いただきました。この表彰は安倍首相が提唱されていた「誰でも再チャレンジが可能な社会を実現することを目指した取組」において顕著な功績または功労のあった個人または団体を顕彰し、優れた取組を広く普及させるとともに、成功事例を広く国民に周知し、社会全体において再チャレンジする気運の高揚を図ることを目的としています。

受賞理由は、私が代表を務めている北海道ネイチャーセンターの活動によるものです。現在、私は道内でスーパードームを展開させていただいている(株)アークスの観光部門を担当させていただいております。然別湖のホテル(ホテル福原)の総支配人、アークストラベルの事業部長、また子会社である(株)北海道ネイチャーセンターの代表取締役を務めております。

この(株)北海道ネイチャーセンターは当社の社内ベンチャーとして一九九〇年に設立いたしました。日本で初めてのアウトドアガイドサービスを提供する法人として設立いたしました。当時は「アウトドア」という言葉がまだ認知されていなく、三年間は仕事がほとんどなく厳しい時期を過ごしました。その後、国内初の自然体験型修学旅行を企画・受託し、一般の団体や個人の観光客の方々にも利用していただけるようになり、会社も足掛け十八年を迎えることができました。

この間、大勢の社員、アルバイトを雇用させていただきましたが、応募いただく方々はデスクワークよりも自然の中の仕事を選んだ方々なので、フリーターをされている方が多くいらっしゃいました。中には、学校の先生から「不登校の生徒さんをアルバイトとして雇用してくれないか」、また知人の方より、「大学受験に失敗して引きこもりになっている息子を雇用してもらいたい」といった、今でいう「ニート」のような若者を雇用させていただいた事もあります。

当初は大変な時期もありましたが、現在では皆さん立派なアウトドアガイドとして成長してくれています。中には自分で会社を興し、北海道内外でアウトドアガイドの社長として成功しているOBも数人おられます。今でも彼ら達とは連携を図り、情報やノウハウの提供を互いにしあっています。

- 前述のような
- ①「アウトドアガイド」という職業を日本に定着させたこと
 - ②フリーターやニート等の若者を多数雇

用し、社会人として自立させてきたこと

③独立した社員や脱サラ等で起業した若者を支援し続けていること

が受賞対象者として評価された事だと聞いています。

今後、北海道観光の振興のため「次世代を担う人材教育」をしっかりとやっていきたいと思っております。

投稿

函館ラ・サール高校への思い出と感謝の気持

衆議院議員
石川 知 裕
(30期)



函館ラ・サール高校がいよいよあと数年で五十周年を迎えるにあたり、半世紀に及ぶ歴史の中で少子高齢化が進み、地方では高校の閉校が出てきている昨今の状況の中、今日まで函館ラ・サール高校の発展にご尽力を頂いた先生方、特に異国の地より函館まで来られた修道士の先生方をはじめ卒業生の方々に心より敬意を表します。また私の生まれ故郷の十勝では昔も今もラ・サール父母の会の活動が盛んでございますがこのような父兄皆様の熱心な活動が函館ラ・サールの発展に大きな下支えとなっていると思えます。父兄の皆様にも改めて敬意を表する次第です。

私の家族は三人兄弟全員が函館ラ・サール高校の卒業生で両親も含めて大変お

世話になりました。学校の先生や寮教諭の先生方には清水先生をはじめ兄弟全員がお世話になった先生もたくさんいらっしゃいます。私にとって函館ラ・サール高校への入学というのは人生で課せられた最初の大きな試験でした。私は三人兄弟の末っ子であります。兄2人が共に入学しており周囲も当然行くものだという捉え方をされておりました。絶対に受からなければという気持が私にもありました。帯広会場での受験でしたので足寄からでは試験会場に時間通りに着くには相違なく早く出発しなければなりません。ですから前日に帯広のホテルに宿泊しましたが緊張のため一睡も出来なかったことを思い出します。合格の報に接した時の気持は今でも忘れられません。「よし」という感激の気持よりもようやく終わったという脱力感がありました。

さていよいよ入学となった訳ですが十五歳にして親元を離れ函館で暮らすということは普通不安になるものです。しかし兄達が既に経験していたこともあり全く不安や寂しさはありませんでした。今でも高校時代の思い出話を語る時にラ・サール寮名物である一年生時の百人部屋のお話をしますがほとんどの方が驚きの声を上げます。お陰でどこでも寝られるようになりました。また義務自習制度やチューター制度なども思い出深いものでした。この寮生活というのは人間形成において大変役に立ったと感謝しております。他人を思いやる心や集団の中で自分が多々あるのではと感じております。部活動は迷わず硬式野球部に所属をし

した。同級生と共に甲子園に出場できるのであれば浪人も辞さずという覚悟で励んでおりました。先だつてご逝去された金井先生は厳しい先生でありましたがご夫婦で本当にお世話になりました。私が総選挙に立候補した時に大変喜んでいただいていたというお話を聞いて当選後に挨拶にお伺いしたいと思っております。勉強が残念ながらできませんでした。勉強に部活にと大変充実した三年間を送らせていただきました。送り出してくれた両親と熱心に勉強を教えてくれた先生方や楽しく過ごさせてくれた学友に本当に感謝しております。今でも人生で一度過ぎた時間はと問われれば高校時代と迷わず答えているくらいです。

卒業後は大学生から秘書を経てお陰さまで現在、函館ラ・サール高校出身としては初の国会議員として国会で活動をさせていただいております。函館ラ・サール高校の校歌に目指すは永遠の真理(とわのしんり)という歌詞がございます。世界平和が叫ばれる中、何故人は争うのか。国と国は争うのか。人類はおろかな過ちを繰り返してまいりました。昨今は我々日本人にも食料とエネルギーの奪い合いの影響が出てきております。世界には必要な食料を得られない方々が八億人いると言われております。世界中の人々が皆平和に暮らせるよう政治の世界において永遠の真理を創ることに励んでまいります。医学の世界では多くの卒業生が第一線でご活躍されておりますがそれも目標とする多くの先輩方がいたからだと思います。私もそのような存在になるとができるように精進いたします。

07年大学別合格者数と年度別推移

卒業年度	2007 H19	2006 H18	2005 H17	2004 H16	2003 H15
国立大学					
北海道大学	27	26	30	26	20
東北大学	6	8	5	8	10
東京大学	3	3	2	2	6
東京工業大学	4				2
一橋大学		4		1	1
名古屋大学		1	1	2	
京都大学	2	2	3	1	
大阪大学	2	1	2		
広島大学		3	1		1
北海道教育大学	3			4	4
室蘭工業大学	2		1	2	3
小樽商科大学		3	2	1	2
旭川医科大学	2	1	3	3	2
帯広畜産大学	3	2			1
弘前大学	2	4	3	4	6
岩手大学	4	1	2	1	1
秋田大学		2			1
山形大学	1		3	3	5
福島大学				1	1
茨城大学		1			1
筑波大学	1	1	3	4	2
宇都宮大学		2			
千葉大学	3	3	1	2	2
埼玉大学	1	2			1
東京外語大学	1	1	1	1	
東京農工大学	2	1	1		
東京海洋大学	2	1			
東京学芸大学	2			1	1
東京商船大学				1	
東京通信大学	1	2	3		
横浜国立大学	2	1	1	3	4
静岡大学	1	1			
新潟大学	2				3
富山大学	1	1			
金沢大学	1			1	
信州大学	2	1	1		
三重大学					1
京都工芸繊維大学		1		1	
神戸大学		1			
和歌山大学		1			
鳥取大学			1		
島根大学		1			
島根医科大学			1		2
山口大学		1		1	1
徳島大学			1		
愛媛大学				1	
九州工業大学		1			
鹿児島大学				1	
琉球大学		1	2	1	
小計	83	84	75	78	84

大学校					
防衛大学校		4	5		2
防衛医科大学校	2	2	1	1	1
航空保安大学校			1	1	
海上保安大学校			1		
小計	2	6	8	2	3

卒業年度	2007 H19	2006 H18	2005 H17	2004 H16	2003 H15	
公立大学						
札幌医科大学	5	1	3	6	2	
釧路公立大学					2	
はこだて未来大学		2			1	
高崎経済大学	1				1	
首都大学(旧:東京理科大学)		1	3	1	2	
国際教育大学	1	1				
横浜国立大学		1			1	
都留文科大学			1		1	
静岡県立大学					1	
京都市立芸術大学		1				
京都府立大学	1	2				
名古屋国立大学			1	1		
大阪府立大学		1				
小計	8	10	8	8	11	
私立大学						
慶應義塾大学	10	13	8	7	13	
早稲田大学	14	12	18	16	20	
上智大学	4	2	1	4	4	
国際基督教大学		3	1	2	1	
中央大学	14	14	15	19	12	
東京理科大学	12	10	6	14	18	
立教大学	8	6	6	11	4	
同志社大学	6	6	1	4	2	
立命館大学	1	6	2	3	8	
岩手医科大学	3		2	1	4	
自治医科大学	1			1		
独協医科大学		1			1	
埼玉医科大学					1	
杏林大学		1			3	
北里大学	4	3	1	3	3	
日本歯科大学	2				1	
東邦大学			2		4	
聖マリアンナ医科大学	1		1		1	
金沢医科大学	2			1		
順天堂大学	3				1	
酪農学園大学	1	3	1		2	
北海道医療大学	3	14	2	8	11	
北海道学園大学	6	9	2	2	9	
青山学院大学	3	4		5	4	
学習院大学	1	1	2	1	2	
芝浦工業大学	1	4	2	1	3	
東京電機大学			1		1	
東京薬科大学	1	2	2	2	3	
日本大学	8	11	5	2	5	
法政大学	7	9	2	3	7	
明治大学	15	12	10	10	7	
明治学院大学	3	2	1	3	1	
関西大学	1		2	1	1	
関西学院大学		1	1	1		
小計	135	155	97	125	157	
その他の私立大学(2007年のみ)						
国学院大学	1				多摩美術大学	1
芝浦工業大学	1				東京工科大学	1
成城大学	1				東京農業大学	4
専修大学	3				武蔵野工業大学	1
ネパダガリフォルニア州立大学	1				金沢工業大学	3

クラブ活動成績 (主要なもの)

〈高体連・高野連 大会の記録〉	
アーチェリー	個人戦ベスト16 佐田 洋輝
硬式テニス部	全道大会出場
柔道部	全道大会 団体戦 北海道ベスト8 個人戦ベスト16 山本 信吾 ベスト8 久保田瑛進
相撲部	全道大会 個人戦第3位 村田 昇平
軟式野球部	春季函館大会 優勝 夏季函館大会 優勝 全国高等学校 軟式野球選手権大会 北海道大会出場
陸上部	高体連全道大会 100m 第5位 渡辺 高校総体 100m 出場 渡辺 国体北海道選手権大会 100m 出場 渡辺
ワンダーフォーゲル部	地区大会 優勝
〈高文連 大会の記録〉	
写真部	全国総合文化祭出品 高野 渡
〈中体連・函館市大会の記録〉	
剣道部	函館市中学校大会 団体戦 優勝
柔道部	全道大会出場 勝又
〈文化系クラブ〉	
中学理科部	子ども衛星アイデア コンテスト 最優秀賞 松信麟太郎

住所変更通知

毎年、同窓会報が多数「転居先不明」で返送されてきます。この会報がお手元に届いた場合でも、「転居先」に転送された場合は、次年度以降には「転居先不明」になる場合がありますので、お手数ですが、下記の「住所変更通知」を事務局にFAXしていただくか、ホームページからご連絡いただくようお願いいたします。
※本データは函館ラ・サール同窓会事務局が責任をもって保管し、同窓会名簿の制作及び同窓会・同期会の連絡以外の用途には一切使用しません。

切り取り線

FAX 0138-54-0365(函館ラ・サール学園事務局)

★は必須事項

ふりがな		(旧姓)※変わっている場合
★氏名	(姓)	(名)
卒業年次	西暦	年3月 回生
★現住所	〒□□□-□□□□	(都・道・府・県)
		(市・区・町・村)
電話	TEL() - FAX() -	携帯電話

勤務先(学校)	名称	TEL() -
メールアドレス	(複数の場合はよくお使いになるアドレスを2つ) @ @	
同窓会サイト加入	済・未 (いずれかに○)	
通信欄	(連絡先を自宅以外とする場合、転居予定などがございましたらその旨をご記入ください)	